論　文

非階層型言語における与格名詞句の位置について：古典ギリシア語からのデータに基づく機能的分析*

近松　明彦

0. 序

近年、ギリシア語等、自由な語順を持つ古い印欧語諸方言の語順に関する議論が盛んになっている。そして、そのような議論に際しては、特に、単一の目的語を有する他動構文（単一目的語構文）に関する議論がよく話題に登るような印象を受ける。関与する項が多ければ多いだけ語順の多様性は増すはずであるから、語順の議論において、二重目的語構文(double object construction) に先立って、先ず単一目的語構文を研究対象とするのは当然であるとも言えよう。

上に述べた傾向とは反対に、筆者は二重目的語構文の語順、ことに与格名詞句と対格名詞句の線形的順序に関心を抱いている。単一目的語構文の語順で問題となるのは通常、主語、目的語、動詞という統語機能が大きく異なる項の間の関係である。それに対し、二重目的語構文の与格名詞句と対格名詞句とはいずれも統語的には目的語という機能を持つ[1]。本稿ではむしろ、このように類似した機能を持つ2 つの名詞句の順序関係を調べることで、古典ギリシア語のような語順の自由な言語（一般に非階層型言語（non - configurational languageと呼ばれる）の語順を決定する要因が浮き彫りになるのではないかと考えている。

尚、ここで名詞句と言うのは、学校文法で言う名詞相当語句の事であり、名詞句の位置に狭義の名詞が単独で生じる事もあれば、代名詞や名詞的用法の形容詞が生起する事もある。

0.1. 古典ギリシア語の語順一般について

古典ギリシア語の語順は自由であると一般に言われている。Schwyzer (1950:p.690)によると、それは屈折形の区別が明確であるためであると言う。とは言え、語順が完全に自由であるという訳でもなく、ある一定の傾向があるとの考え方が一般的である。この一定の語順は、一般に習慣的な語順 (habituelle Wortfolge)と呼ばれている(Schwyzer,1950)。Schwyzer(1950:

p.691)によると、語順の自由な古代ギリシア語も、日常の自然な発話では、習慣的語順になっているという。

それでは、この習慣的語順とはいかなるものであろうか？ Humbert(1954: p.95, §.151)は、限定詞(déterminant)が被限定詞(déterminé)に先行するという原則（印欧語にまで遡る原則）がギリシア語にも働いているのだと言う。即ち、SVCの構文では属詞（SVCのC）が主語に先行する事が多く、また、主語が省略された他動詞構文では、この構文初頭の位置には直接目的語が現れるのだと考えられているのである(Humbert(1954: p.95,§.151))。

一方、Schwyzer(1950: p.691) は、 習慣的語順に対して、 臨時的語順(okkasionelle Wortfolge)によって語順が自由であるとの印象が出てくるのだと考えている。この臨時的語順は、Schwyzer(1950: p.691)によると、文頭、文末への置き換えによって文の成分を際だたせるのだと言う：即ち、文頭は、特に重要な成分を前景(Vordergrund)に移すことが出来、 文末は緊張を生むと言うのである。そして、但し、文末には追加的な要素も来得るとも言う(Schwyzer, 1950)。

また、Humbert(1954: p.97-98, §.154)は、任意の語に価値を与えるための配列法として次の3つを挙げている： 即ち、文頭の方に置く事、文の最後の語として孤立させる事、 文法的に結合した語群の分離（disjonction、文中のどの位置でも可能）、という3つの配列法がそれである(Humbert, 1954)。

0.2. ギリシア語の語順と機能的構文論

上の0.1.において概観した説は、いわゆる機能的構文論に関する近年の研究を想起させるであろう。そこで、機能的構文論について若干触れておきたいと思う。福地(1985:2.3.3.) によると、「文の要素が、それらの担う伝達情報の量に応じて、少いものから多いものへ順に並べられる」という仮説があって、「機能的構文論」(functional sentence perspective) と呼ばれているという。

それでは上述の情報量とはいかにして知ることができるのであろうか？よく言われる事は旧い情報は情報量が少なく、新しい情報は情報量が多いという事である。福地(1985:2.1.1.1.) によると、繰り返し(iteration)、 指示(reference)、代用(substitution)、省略(ellipsis)、語彙的な結束性(lexical cohesion)、接続詞などのうち多くは旧情報に関係しているという。 このうち、指示表現には定冠詞を伴った名詞、指示代名詞、人称代名詞などが含まれ、通常旧情報を担うという(福地,1985: 2.1.1.1.1.)。

この事は古典ギリシア語にも当てはまると言える。古典ギリシア語おいても冠詞は通常、定的であり、既知であると言う(Smyth,1956: 1118)。また、

ギリシア語の語順決定の要因としても機能的構文論との関連が議論されるようになってきている。竹島(1985)は次のように述べている：

> そして語順が固定している英語に於て、ある語に焦点を当てるために、どの語に強勢を置くかは話し手の選択権optionであるのと全く同様に高低アクセントを持つ古典ギリシア語で、ある語に焦点を当てるために動詞の位置として、文頭、文中、文末のどれを選ぶかは話し手の選択権なのであり、聴き手は常に動詞のこの三つの位置を予期していなければならない、・・・・（竹島，1985: p.98）

ことにギリシア語の臨時的語順を生じる派生は、例えば英語においてよく論じられる、話題化(topicalization)、左方転移(left dislocation)などの一連のプロセスを思わせるであろう[2]。

1. 先行研究と本稿の目的

前節では、先行研究に基づいて、古典ギリシア語の語順が自由であり、それが機能的構文論と関連しているという事を見た。竹島(1985)に見られるように、機能論の古典希語研究への応用を押し進めることは、ある意味で望ましい事と思われる。例えば、Humbert(1954:§.153)は与格・属格の位置は決め難いとした上で、二重目的語構文では与格が文頭に立ち易いと述べているが、そういった従来の観察に対して、本稿は二重目的語構文における与格名詞句と対格名詞句の語順についてもう一度、機能的構文論の観点から捉え直したいと考える。

2. 使用テクスト

今回の調査で用いた用例はすべて THE LOEB CLASSICAL LIBRARY の EURIPIDES, I-IV に収録された作品中、次の10作品から取った（本稿末尾の参考文献、使用テクストのリストを参照。以下、例文等のギリシア文字はすべてローマ字母に翻字して表記して行く）：

ALKEESTIS(Al)　ANDROMAK^{h}EE(An)　EKABEE(He)　EERAKLEIDAI (Hr)　EERAKAEES MAINOMENOS(HF)　IPPOLYTOS STP^{h}ANEEP^{h}OROS(Hi)　IOON(Io)　MEEDEIA(Md)　IKETIDES(Su)　TROOIADES(Tr)

（(　)内は略称）

3. 調査結果

本稿の関心は与格名詞句と対格名詞句の線形的、相対的な順序関係にある。主格名詞句や動詞の位置関係なども語順分析の上で重要ではあるが、テーマを明確にするために、今回の調査では考察の対象からはずす事にする。与格

名詞句、対格名詞句の語順のタイプを次に大まかに示しておく事にしよう。（日本語訳については、希語構文理解に役立つように、敢えて直訳文体を用いている）。

最初に、「与格－対格」タイプの例から始めたい。

(1) álla *ksénois*$_{DAT}$ édookas *Argeîas kóras*$_{ACC}$? (Su 135)

「では、外国人達に アルゴスの娘らを（あなたは）与えたのか？」

次に、「対格－与格」タイプの例を示そう。

(2) dídou dè *k*^{h}*eîr'*$_{ACC}$ *hupeerétee*$_i$ *p*^{h}*îloo*$_{iDAT}$. (HF 1398)

「あなたは手を 助人である友人に差し出しなさい（与えよ）！」

以上の2種類のタイプが基本となる。但し、実際には名詞句の一部が外置される事(hyperbaton)のために、「与格－対格－与格」及び「対格－与格－対格」といったタイプも見られる[3)]。

・「与格－対格－与格」タイプの例は次の通りである。

(3) *autoî*$_{iDAT}$ *taûta*$_{ACC}$ *soî*$_{DAT}$ dídoom' ék^{h}ein. (Hc 1276)

「あなた自身に これらを持つ様に与える」

・「対格－与格－対格」タイプの例。

(4) ...., ouk àn eîk^{h}on *teéndeACC soiDAT* doûnai *k*^{h}*árin*$_{ACC}$ (Hc 899)

「この慈悲を あなたに与えることが私は出来ないであろう」

上の(1)-(4)の例文で4種類の構文のタイプがあることを例示したが、**本稿では、「与格－対格」タイプ及び「対格－与格」タイプに焦点を当てて議論、分析を進める予定である。**「与格－対格－与格」、「対格－与格－対格」といったタイプは用例数が比較的少数である上に、与格の名詞句と対格の名詞句の前後関係を容易に判断し得ないという問題点もある。枚数の制限や簡単化といった事情もあって、「与格－対格－与格」、「対格－与格－対格」については、本稿では考察の対象から除外し、他の機会に改めて論じることとしたい。

3.1. 「与格－対格」と「対格－与格」の出現頻度の比率

さて、didoomi を持つ用例全体のうち、与格の名詞句、対格の名詞句を共に有するものは 32.6%（計89例中29例）であり、他方、「対格－与格」タイプは41.6%（89例中37例）である。

この点から、「対格－与格」タイプの方がやや無標であり、「与格－対格」の方が有標の傾向があると言えよう。

3.2. 分析

3.2.1.「与格－対格」タイプ

先ず、「与格－対格」タイプについて見てゆきたいと思う。

3.2.1.1.「情報量^{DAT}＝情報量^{ACC}」タイプ

このタイプは与格の名詞句と対格の名詞句が情報量において、ほぼ対等であると考えられるタイプである（情報量については、0.2.を参照）。

（甲）「代名詞－代名詞」タイプ

このタイプでは与格・対格共に代名詞が来る[4]。即ち、与格・対格共に旧い情報を持つのである。

(5) hoíper gàr auteèn eksemók^{h}t^{h}eesan dorí, ktaneîn *emoi*$_{DAT/Pron}$ *nin*$_{ACC/Pron}$ édosan, ... (Tr 874)

「というのも、彼女を槍でもって努力して得た者達が、殺すようにと私に 彼女をくれたのだ・・・」

類例：Tr 454.

（乙）「名詞－名詞」タイプ

このタイプは更に2つの下位タイプを持つ。

（乙－1）「冠詞－冠詞」タイプ

このタイプは与格・対格共に冠詞を持ち、旧情報を伝える。

(6) ..., ouk^{h}ì *toî*$_{ART}$ *ploútoo*$_{DAT}$ didoùs *tòn*$_{ART}$ *pleîston*$_{ACC}$, ... (Su 407)

「富に対し 最も多くのものを与える事はなく・・・」

（乙－2）「無冠詞－無冠詞」タイプ

このタイプは与格、対格、共に無冠詞で新しい情報を与える。

(7) ... ent^{h}a *Loksía*$_{DAT}$ *díkeen*$_{ACC}$ dídoosi manías, ... (An 52)

「・・・そこで、ロクシアスに狂気の償いを与える、・・・」

類例：Hc 118, HF 779, HF 286, Md 1298, Su 135, Su 1203, HF 600, Md 1070, HF 1402

3.2.1.2.「情報量^{DAT}＜情報量^{ACC}」タイプ

このタイプは与格名詞句が右側にある対格名詞句よりも、より少ない情報量を担うタイプである。その点で機能的構文論の仮説に従っていると言える。

（甲）「代名詞－名詞」タイプ

このタイプには次の様な例が含まれる。

(8) kaì gàr ouk ákontí *moi*$_{DAT/Pron}$ dídoos *épainon*$_{ACC/Noun}$ toônd', ... (Su 858)

「というのも、気が進まない訳ではない私にこの人達の賞賛を（あなたは）下さる・・・」

このタイプの特徴は無論右側にある対格の名詞句に、より多くの情報がある

という事になるが、(9)の対話にはそのことが典型的に見られる。

(9)　KREOUSA

toútoo$_{\text{DAT/PRON}}$ dídoosi Pallàs *ónti neogónoo*$_{\text{I}}$ —

PAIDAGOOGOS

Tî$_{\text{ACC}}$ *k*^{h}*reêma*$_{\text{ACC}}$? méllon gàr ti prosp^{h}éreis épos.

KREOUSA

dissous stalagmoùs$_{\text{ACC}}$ haímatos Gorgoûs ápo.　(Io 1001)

「　クレウサ

生まれたてのその人にパラスは与える —

老僕

どんなものをですか？何かを意図した言葉をあなたは発するのですから。

クレウサ

ゴルゴーから出た2滴の血液を」

クレウサの2つの発言は実は本来1つの文であるべきもので、それが2 つに分離しているのである。クレウサの最後の発言（「ゴルゴーから出た2 滴の血液を」）は老僕の質問への答えであり、最も聞きたい部分 — 情報量の最も多い部分 — なのだと言えよう。確かに、与格名詞句 "toútoo$_{\text{I}}$...ónti neogónoo$_{\text{I}}$"「生まれたてのその人に」の方も重要度が低くはないが（3 語から成る上に、後半部（ónti neogónoo$_{\text{I}}$「生まれたてである・・・」）が後置されているなど）、しかし、対話の構成から見て、明かに対格句の方に更に大きな強調が置かれていると言える。

これまでの例では与格の名詞句が指示代名詞によって占められていたが、関係代名詞の場合もこのタイプに含めてよかろう。というのは、関係代名詞は通常、典型的な前方照応の代名詞だからである。

(10) eê tàn toû P^{h}oíbou part^{h}énon, *haâ*$_{\text{DAT/REI}}$ *géras*$_{\text{ACC}}$ ho k^{h}rusokómas édook' *álektron zóan*$_{\text{ACC}}$;　(Tr 254)

「何と、［その金髪の方が（その人に$_{\text{REI}}$）贈物として未婚の人生をお与えになった］ポイボスの乙女をか？」

更に、対格形の名詞句ではなく、埋め込み文が直接目的語として機能する例が見られる。これも「代名詞－名詞」に準じた例とする。

(11) pateèr mèn oûn *soi*$_{\text{DAT/PRON}}$ póntios p^{h}ronoôn kaloûs édook^{h}' *hósonper k*^{h}*reên*, epeíper eé$_{\text{I}}$nesen'　(Hi 1319)

「海を支配する父上は、約束した以上、よく意図して、あなたに 必要なだけ与えた」

(11)では、人称代名詞が与格形となっているのに対し、直接目的語として機能している節の方は2語からなる情報量の多い要素である。

「代名詞－代名詞」タイプの類例： Hi 334, HF 942, Hi 1425, HF 473, Tr 80, Hc 540, Hr 307, Hc 1274, Su 145.

3.2.1.3. 「情報量^{DAT}＞情報量^{ACC}」タイプ

このタイプは与格名詞句が右側にある対格名詞句よりもより高い情報量を持つタイプである。その点で機能的構文論の原則に反することになる。このタイプは上の「情報量^{DAT}＝情報量^{ACC}」、「情報量^{DAT}＜情報量^{ACC}」に比べて少数である。

（甲）「名詞－名詞」タイプ

「情報量^{DAT}＞情報量^{ACC}」タイプに属すると認定される「名詞－名詞」タイプは「無冠詞－冠詞」である。

(12) ...., *theersì*$_{DAT}$ doósousin dásast^{h}ai, *teèn*$_{ACC/ART}$ Apólloonos *látrin*$_{ACC}$. (Tr 450)

「引き裂かれるように、野獣に（彼らは）渡すであろう。アポルローンに仕える者（である私）を」

類例：Io 69, Io 1536

・まとめ１

以上の「与格－対格」タイプは情報量の観点から次のようにまとめることが出来る。

「情報量^{DAT}＝情報量^{ACC}」・・・・44.8%（29例中13例）

「情報量^{DAT}＜情報量^{ACC}」・・・・44.8%（29例中13例）

「情報量^{DAT}＞情報量^{ACC}」・・・・10.3%（29例中 3例）

上の結果から、「与格－対格」タイプにおいては、「情報量^{DAT}＞情報量^{ACC}」タイプが頻度について最も低い値を示していることがわかる。この「情報量^{DAT}＞情報量^{ACC}」タイプは左の要素の方が右の要素よりも多くの情報量を担っている点で機能的構文論の原則に反している。そのような例外的ケースを例を少ししか含まないのであるから、「与格－対格」タイプの語順は概ね機能的構文論の原理に従っているものと見てさしつかえあるまい。

3.2.2. 「対格－与格」タイプ

次に、「対格－与格」タイプについて調べたいと思う。

3.2.2.1. 「情報量^{ACC}＝情報量^{DAT}」タイプ

このタイプは対格名詞句とその右側にある与格名詞句が情報量について対等なタイプである。このタイプは、更に次の幾つかの下位タイプに分かれている。

（甲）「代名詞－代名詞」タイプ

このタイプでは、対格形の名詞句も与格形の名詞句も共に旧情報を担っている。次にその例を挙げておこう。

(13) toôn soôn d'heínekʰ', hoos mátʰee$_{1}$, lógoon doósoo *tód'*$_{ACC/Pron}$ *auteê*$_{1DAT/Pron}$, teênde d'ou doósoo kʰárin.
(Tr 913)
「（彼女が）知っている通り、あなたの言葉の故に<u>このことを</u> <u>彼女に</u>（私は）許す（＜与える）つもりなのであって、この女の故に慈悲を与えるのではない」

指示代名詞が対格形の名詞を限定している例もある。

(14) meè doôi$_{1}$s *tád' ostâ*$_{ACC}$ *toîsd'*$_{DAT}$ es Argeían kʰtʰóna...
(Su 1185)
「・・・<u>これらの骨を</u>、<u>これらの人々に対して</u>、 アルゴスの地に渡すな！」

また、次のような例に注目したい。

(15) ..., kaì pateèr metaskʰétoo teês heedoneês$_{GEN}$ teêsd' *heês*$_{GEN/Rel}$ édookʰ' *humîn*$_{DAT/Pron}$ egoó. (Io 1469)
「そして、［私が（<u>それを</u>$_{Rel}$）<u>あなた方に</u>与えた］この喜びを、父が分かち合わん事を！」

(15) においては、 関係節内の直接目的語である関係代名詞（ heês '(of) which'）が属格形からの牽引(attraction)によって、対格形の代わりに、属格形をとっている。従って、(15)は「属格－与格」ではあるが、「対格－与格」タイプに準ずるものとして扱うことにする。関係代名詞は通常前方照応的な要素であるから、旧情報を担う。

「代名詞－代名詞」タイプの類例：Hc 1134, Sul1 85.

（乙）「名詞－名詞」タイプ

このタイプには次の2つの下位タイプが属している。

（乙－1）「冠詞－冠詞」タイプ

このタイプは対格名詞句、与格名詞句共に古い情報を担う。

(16) .... *tò soôma*$_{ACC}$ t'ou dídoosi *toîs enantíois*$_{DAT}$, ...
(HF 200)
「<u>体を</u>、<u>対立する者達に</u>さらさない（＜与えない）・・・・」

類例：Io 1285

（乙－2）「無冠詞－無冠詞」タイプ

このタイプでは、与格・対格が共に新しい情報を伝えているものと考え得

る。

(17) ....hóstis *kórasACC* mèn tʰespʰátois Pʰoíbou zugeìs *xénoisinDAT* hoôd' édookas hoos zoóntoon tʰeoôn, ...

(Su 221)

「ポイボスの神託で縛られて、神々が生きているものとして娘達を外国人達に与えた（所の）あなたは・・・・」

類例：An 217, Hc 846, An 1087, Tr 1146, Tr 87, HF 1398.

3.2.2.2.「情報量ACC＜情報量DAT」タイプ

このタイプは対格名詞句の方が、右側にある与格名詞句よりも情報量が少ないタイプである。従って、機能的構文論の原則にかなったタイプと言える。このタイプは次の2つの下位タイプから成り立つ。

（甲）「代名詞－名詞」タイプ

このタイプでは与格名詞句に冠詞のない名詞が来る。

(18) kám'ACC édooke *paidì soôi*DAT

epíseemon euneèn Heerakleî sunoikísas (HF 67)

「そして、注目すべき結婚でヘラクレスに嫁がせて、（彼は）私をあなたの子供に与えた」

類例：Al 1024, Md 955, Su 364, HF 1360.

（乙）「名詞－名詞」タイプ

このタイプはここでは「冠詞－無冠詞」タイプである。

(19) *tàsACC* dè prìn *spondàsACC* tʰeoû dídoosi *gaîaDAT*, ...

(Io 1193)

「まず、（神の）お神酒を 大地に（彼は）与える・・・・」

類例：Io 1532, Hc 1220, Tr 372.

3.2.2.3.「情報量ACC＞情報量DAT」

このタイプは対格名詞句の方が、右側にある与格名詞句より多くの情報量を持っている。つまり、機能的構文論の原則に反しているのである。

（甲）「代名詞－名詞」タイプ

このタイプでは左側の対格名詞句の方が後方照応的ないし不定的であり、新しい情報を担っているものと考えられ得るのである。

(20) ouk eî *tiACC* doosoon *teêi* *perîss' eukardîooiDAT* psukʰeén t'*arîsteeiDAT* : (Hc 579)

「いかなるものをも、非常に剛毅で魂において最も貴い（女性）に、与えないのであろうか？」

類例：Al 970.

（乙）「名詞－代名詞」タイプ

このタイプでは対格の句がまったき名詞であり、右側にある与格の句が代名詞である所から、「情報量^{ACC}＞情報量^{DAT}」タイプとして分類される。このタイプは更に次の下位タイプに分けられる。

（乙－１）「冠詞－」タイプ

このタイプでは、対格の句が名詞であるとは言え、定冠詞を持つのだから、対格も与格も共に旧情報を担っている事になる。この点は今後の課題として考えて行かねばならないが、［冠詞＋名詞］の方が代名詞より意味内容が豊富であると仮定し、ここでは「情報量^{ACC}＞情報量^{DAT}」として扱った。

(21) hoûtos dè doósei *teèn*$_{ACC}$ *díkeen*$_{ACC}$
t^{h}anoòn *emoî*$_{DAT/PRON}$. (Hr 1025)
「この者は、死んで償いを 私に支払う事になろう」

類例：Hr 551.

（乙－２）「無冠詞－」タイプ

(22) *pitúlous*$_{ACC}$ didoûsa k^{h}eirós, ioó *moî*$_{DAT/PRON}$ *moi*$_{DAT/PRON}$.
(Tr 1236)
「手の打撃を、ああ、私に、私に与えつつ・・・・」

更にこのタイプの変種として次の様な用例が見いだされる。

(23) steík^{h}oomen, Ádrast^{h}', *hórkia*$_{ACC}$ doômen *toôi d'*$_{DAT}$ *andrî*$_{DAT}$
póleî$_{DAT}$ t'' .... (Su 1232)
「アドラストスよ！（我々は）行こうではないか。誓いを、この男と都市のために、（我々は）立てよう（与えよう）ではないか」

(23)では、与格名詞句が単独の代名詞ではなく、「代名詞＋名詞」という形式であるから、対格と与格の情報量の差は少ないかも知れない。

類例：Io 781, Hc 1053.

（丙）「名詞－名詞」タイプ

「名詞－名詞」タイプのうち、「無冠詞－冠詞」は「情報量^{ACC}＞情報量^{DAT}」と認定される。

(24) ..., *díkas*$_{ACC}$ te doóseis *toîsi*$_{DAT/ART}$ *keedestaîs*$_{DAT}$ éti.
(Al 731)
「やはり償いを 血縁の者達に（あなたは）支払うであろう」

類例：Io 1585, Io 821, Su 884, Hr 1024, An 669.

（丁）その他

以上の他に、対格名詞句の代わりに節(clause)が直接目的語として用いられている例がある。節は名詞句よりも多くの語から成り、それだけ多くの情

報量を持つものと考えられている[5]。従って、次の(25)のような文では、左側にある直接目的語として機能する節の方が、右の方にある与格の代名詞よりも情報量が多いと考えられ、「情報量^{ACC}＞情報量^{DAT}」タイプに準ずるものとして扱ってもさしつかえないであろうと考えられる。尚、文頭の関係代名詞hótoo$_1$ 'to whom'は、それだけで直接目的語として働き、paîd' 'child'は、その先行詞ともとることができるが、むしろその同格ないし補語となっている。

(25) *hôtoo$_1$ xunanteéseien ek naoû sut^{h}eîs proótoo$_1$ pósis sós, paîd$_{ACC}$' édook' autoô$_{1DAT}$ t^{h}eós.* (Io 788)

「あなたの御主人が神殿から急ぎ出て最初に遭遇する人を、子供として、神は彼にお与えになった」

・まとめ2

以上論じてきた「対格－与格」タイプは、次のようにまとめられ得る。

「情報量^{ACC}＝情報量^{DAT}」・・・・35.1%（37例中13例）

「情報量^{ACC}＜情報量^{DAT}」・・・・24.3%（37例中 9例）

「情報量^{ACC}＞情報量^{DAT}」・・・・40.5%（37例中15例）

以上の結果から「情報量^{ACC}＞情報量^{DAT}」タイプの頻度が「対格－与格」タイプ中最も多く見られることがわかる。機能的構文論の原則に反する「情報量^{ACC}＞情報量^{DAT}」タイプの頻度が最も高いという事は、「対格－与格」という語順が機能的構文論の原則以外の何等かの要因によって決定されているという事を示しているものと言えよう。

3.2.3. 「与格－対格」タイプと「対格－与格」タイプの比較

既に見たように、「与格－対格」タイプは概ね機能的構文論の原則に従った結果を示しており、一方、「対格－与格」タイプでは機能的構文論の原則に反する例が多い。この事から、「対格－与格」という語順は機能的構文論による要因とは別の何等かの要因によって、いわば「固定された語順」と考えるほかはないであろう。他方、機能的構文論の原則にそった「与格－対格」という語順は恐らく機能的構文論の要因によって、上述の「固定された語順」から派生されたのではないかと想像される。つまり、統語論のレベルで決まる「オリジナル」な語順が「対格－与格」であり、その上に機能的構文論の原則に動機付けられた移動変形が適用された結果、「与格－対格」の語順が得られるのではないだろうか。このことは、3.1.で述べた、「与格－対格」が有標であるという傾向と合致するものである。

4.結論

既に述べた様に、古典ギリシア語の二重目的語名詞文の語順において、与

格名詞句と対格名詞句の前後関係は「対格－与格」が基本である事が明かとなった。そして、この語順から機能的構文論に基づいた要因によって、この語順から派生的に「与格－対格」という順序が生じるものと考えられる。

Humbert(1954)は「与格が文頭に立ち易い」という観察（本稿第1節で既に言及）を行っているが、与格名詞句の先行する構文が基本的なものでなく、派生されたものである事が本研究によって明かになった。

本稿での主たる考察対象となったのは、「与格－対格」、「対格－与格」といったタイプであったが、「与格－対格－与格」および「対格－与格－対格」のタイプについては、用例数もさほど多くはなく、また簡単化や枚数の制約等の事情もあって、今回は考察の対象から除外した。これについては、他の機会に議論を譲ることとしたい。

情報の重要性の度合と関係の深い代名詞と冠詞（いずれも旧情報）といった異なるタイプの指示表現の間の相互の関係(3.2.2.3.,乙－1参照）については今後の課題として取り組みたい。そして、何よりも、今回の調査が依拠したテクストは韻文である。韻文の語順には当然、韻律が影響してこよう。今回は韻律の要因を無視したが、この点も今後の課題である。

注

* 本稿執筆に当たっては、多くの方々から助言を頂いた。感謝申し上げる。
本稿は、1987年に執筆された未発表の手稿の一部に加筆、訂正を施したものである（当初の題名は「古典ギリシア語の三項名詞文における与格の項と対格の項の語順について」であった）。論者は現在主として生成文法をベースとした立場に立っているが、 本稿が、分類学的(taxonomic)、機能論的(functionalistic) な考え方を採用しているのは、1987年当時、論者がそのような立場に立っていたためであり、この点は、今回の加筆、訂正に際しても、敢えて変更しなかった。

1)いわゆるactantのうち、主語を動詞の人称語尾により標示する事などから考えて、actantを更に主語と目的語とに区別することは十分意味あるものと考えられる。従って、筆者は与格名詞句と対格名詞句を統語的には非主語のactant＝目的語として一括するのである。

2)例えば、英語のDative movement は間接目的語がトピックでない時には不適当であるという(Creider(1976:6-7))。 これなどは、機能的構文論が語順決定に影響した例と言えよう。

3)更に、対格名詞を修飾する属格名詞が外置されて、「対格－与格－属格」などというタイプの例も少数存在する。これらは、右端の属格名詞が左端

の対格名詞と共に一つの名詞句を構成するので、「対格－与格－対格」タイプの下位タイプとして分類した。

4)本稿では特に断わりのない限り、代名詞と言えば、前方照応か、あるいはテクスト外的指示の旧情報を担うものに限られることにする。少数ながら、不定代名詞や後方照応的なものがあるが、その際には特にその旨を記す。

5)福地(1985: 2.2.1.)は次のように述べている：「・・・・、修飾語などが付いて長くなった語句はそうでない語句に較べて意味内容が豊かであり、それだけ情報量も大きくなる。」

6)本研究では、左方転移を移動規則として扱っているが、これを移動規則ではないとする見方もあり、現在では後者の説の方が一般的であるようである。原口・鷲尾(1988: 3.2.8.)参照。

参考文献

Creider, C. A. (1979): "On the explanation of transformations." In T.Givón(ed.): *Syntax and semantics 12: Discourse and syntax.* New York, Academic press.

福地肇(1985): 『新英文法選書 10・談話の構造』, 東京, 大修館書店.

原口庄輔・鷲尾龍一(1988):『現代の英文法 第11巻・変形』, 東京, 研究社.

Humbert, J. (1954): *Syntaxe Grecque*(2e. édition), Paris, Editions Klincksieck.

Schwyzer, E. (1950): *Griechische Grammatik*, zweiter Band. München: C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung.

竹島俊之(1985):「古典ギリシア語の人称表現の実体」, 『言語文化研究』(広島大学総合科学部紀要V), 第11巻.

_____(1986):「古典ギリシア語の εἶναι (be動詞) の用法についての一考察」, 『言語文化研究』(広島大学総合科学部紀要V), 第12巻.

安井稔(ed.)(1971): 『新言語学辞典』, 東京, 研究社.

使用テクスト

EURIPIDES I. (The Loeb Classical Library), Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1959.

EURIPIDES II. (The Loeb Classical Library), Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1958.

EURIPIDES III. (The Loeb Classical Library), Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1962.

Massachusetts, Harvard University Press, 1958.
（参照した日本語訳）
『ギリシア悲劇 III、エウリピデス（上）』（ちくま文庫），松平千秋他訳，東京，筑摩書房，1986.

On the syntactic position of the dative noun phrase in non-configurational language: A functional analysis based on data from Classical Greek

Akihiko CHIKAMATSU

This article deals with the question of the basic word order in double object construction in Classical Greek: the main claim is that ACCUSATIVE - DATIVE order is basic, and that DATIVE - ACCUSATIVE order is secondary.

It is widely known that various word orders are possible in Classical Greek. Many analysts say, however, that the word order in Classical Greek is not perfectly free and that there must be a basic (or 'habitual') word order. To examine this hypothesis, this article focuses on the order of accusative and dative noun phrases in the double object construction. As a "corpus", the ten works written by Euripides were adopted, from which examples with *"didoomi" (to give)* were collected.

Many of the examples were classifiable into two groups, DATIVE - ACCUSATIVE and ACCUSATIVE - DATIVE, and moreover, they were analyzed in terms of "the functional sentence perspective" (i.e., that an element with more information precedes another element with less information (Fukuchi, 1984)). It was found that the DATIVE - ACCUSATIVE examples tended to be compatible with the above-mentioned perspective, whereas the ACCUSATIVE - DATIVE examples were, in many cases, incompatible. This implies that ACCUSATIVE - DATIVE word order is determined by some principle other than this perspective. The ACCUSATIVE - DATIVE may be the originally fixed order, from which the DATIVE - ACCUSATIVE order is secondarily derived. The latter can be explained in terms of the functional sentence perspective.